

餃子の調和

早稲田大学高等学院中学部 一年 上條 隼

今日の晩御飯は餃子だ。学校から帰宅して、玄関のドアを開けた瞬間、私はそう思った。

自転車のカギを玄関のそばにある棚に戻し、アルコールで手を消毒。そしてぐさま、手を洗う。ハッピーバースデーを2回歌いながら。初めの頃はこの手順がめんどくさかったが、今はもう慣れてしまった。

手を洗い終わり、リビングに顔を出すと、果たして、母は餃子を作っていた。今は肉とニラが詰まった具を、皮に包んでいる。「さっきのにおいは、ニラか。」と思いつながら、母のスマホから流れているラジオに耳を傾けた。最近、芸人のものがお気に入りらしい。今は漫才師のものを聴いている。

ふと「お帰りー。」と声が聞こえた。母が顔を上げていた。そして母は、「今日餃子だから手伝ってくれる？」

と言った。私は普段、母の手伝いはめったにしないのだが、餃子には抗えず、すぐに了承して駆け足で自分の部屋に向かい仕度をした。

私は何かと不器用だ。餃子の皮で具を包んでいる時、母から

「空気入れすぎだよ。ほらそれも。」

と開始早々、注意をくらった。母曰く、餃子は具と空気のバランスが大切らしい。私も、意識しているものの、空気が大きくなってしまふ。具と皮が密接していても美味しいと思うのだが、やはり母は注意してくる。

「あのね、具と皮だけじゃ調和しないの。その二つの関係を保つ、間の空気が大事なんだから。あっ、そこ具入れすぎ。」

はあ。ため息をつきながら、一つ蜂蜜でも入れてやろうかと思っていると、母の言った「調和」という言葉が気になった。なんだっけ。ああそうだ。私は手を止め、ふと先週の日曜日のことを思い出した。

久しぶりの気持ちの良い晴れた日のことだった。私はすぐ近くの本屋を訪れていた。そこで、小学校のころの地元の友達に偶然出会い、公民館で他の友達たちと一緒に遊ぶこととなった。

だが、何かぎこちなかったことを覚えている。みんなが前と印象が変わっていたのだ。外見ではなく、中身が。

「おいて行かれた。」

迷わず私はそう感じ、寂しくなった。

「なーにやってんの。手え止まってるよー。」

ぼんやりとしていた私に母はすかさず言った。私は具を手に取り丸めた。

ああ餃子だ。私は具で、みんなは皮。みんなは私を取り巻く。いや包む。しかしその餃子は空気が多かった。

受験して私はみんなとは違う中学に入った。私の住む地域としては珍しい方だった。私は連絡先もつないだんだし、大丈夫。安心していた。でも結果は違った。私はみんなから離れてしまった。壁は高かった。

母が餃子を焼いている。私は空気を抜くべく、友達へできる限りメッセージを送った。待っている間、自分は忘れられているのではないかと思い、返信におびえていた。すると返信は意外にも早くしてくれ、お互い最近の状況を尋ねあった。それが懐かしくもあり、また新鮮さも感じられた。また、仲が良かった友達とは以前よりも話しやすく感じた。具と皮が触れあいすぎていたのだと思う。

間。それは人と向き合うために欠かせないもののように感じる。しかし、そうは言っても難しい。目には当然見えない。でも自ら意識することは可能だと私は思う。大きいのなら、はなして。小さいのなら、歩み寄って。そうやって調和を心がけていくことが人との関係を良い方向へ築いていく。私にとって間は共に寄り添っていくようなものと思う。

餃子が完成した。私は一足先に、餃子をほおばった。やはり母の作った調和のとれた餃子は格別だった。すると、すぐ横で父が

「なんで餃子に蜂蜜がああ。」

と悲鳴を上げていた。